

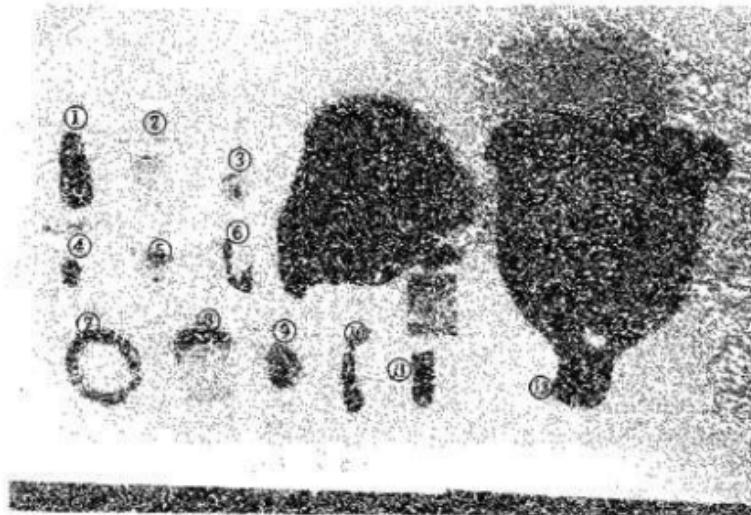
昭和四十七年三月

鹿児島県西之表市住吉

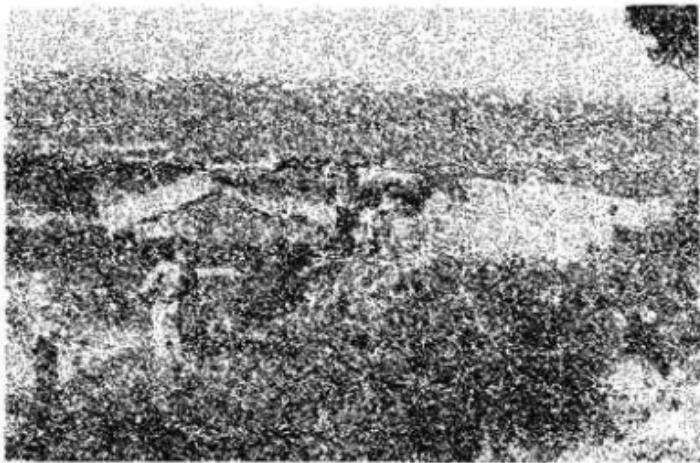
上能野貝塚発掘概報

発掘担当者 県文化財専門委員

河口貞徳



- ① 磨製石斧 ②貝 附 ③錐 飾 ④鹿角製連し
⑤錐 飾 ⑥鉄製的針 ⑦貝 榛 ⑧貝符半製品
⑨貝 飾 ⑩鹿 角 ⑪石 器 ⑫土器破片 ⑬壺形土器



A トレンチより海をのぞむ

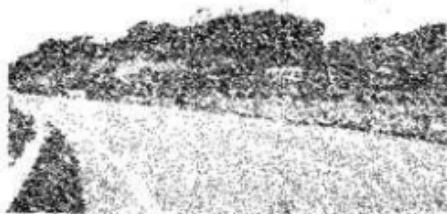


B トレンチ堀壁

上能野貝塚

河口貞徳

一 遺跡の環境



第一図 上能野貝塚全景

上能野貝塚は鹿児島県西之表市住吉上能野にある。西之表市役所から直線距離にして五八五糠南方の西海岸に位置している。大町川が下刻してつくつた谷は沖積平野となつて現在は水田となり、その南側には能野集落が成立し、北側はなだらかな丘陵となつて海にのぞみ、表面は林地と畑地で覆われている。これは本来最下位の海岸段丘面であつて、その末端部は県道上中線によつて切断されている。遺跡は県道をはさんで上下に形成されたものであるが、県道より海岸側は二〇年ほど前に削平されて宅地となり、現在は漁港をとどめていない。県道より山手の部分は砂丘となり、大町川の支流と県道との交叉点を起点として、北東へ五〇米四方の地域が遺跡となつている。

遺跡地は標高一七メートル、西南方へ傾斜し、大町川のつくつた低地へ急崖をなして望んでいる。中央部は市道で切斷され、その両側にそれぞれ貝塚の存在が認められた。

貝塚面はいづれも標高一四・七メートル一致していることからみても、両側の貝塚はもともと続いていたもので、出土する土器もこのことを裏づけている。

種子島は中種子町の地峡部を除きほとんど岩盤性の海岸で囲まれ、その岩盤上に砂丘の堆積が行なわれているのが常である。上能野貝塚もこの例にもれず、貝岩とみられる熊毛脣が基盤となり、その上に砂丘の堆積がみられ、貝塚は砂丘の間脣となつていている。したがつて上能野貝塚形成の時期は砂丘堆積の途中ということになる。

貝塚周辺には埋葬が行なわれていたことが、これまでに行なわれた宅地造成、県道、市道の工事などによつて判明している。貝塚の西側の、県道、海岸道路と大町川によつて囲まれた三角地は、現在は県道路面より稍々低くなつてゐるが、二〇年前に宅地造成が行なわれるまでは、遺跡地の丘陵の延長で現在より五米程高く、松林であつたという。この地域は北より藏元、吉川、浜添、畠山の四軒の住宅となつており、吉川家の西側には砂糖小屋があつた。宅地化工事のおりに畠山氏（当時は横山氏）の宅地からは貝輪をはめた人骨、浜添氏宅地からは人骨三体以上、畠山、浜添氏の中間の畠地からは人骨一体以上、海岸側砂糖小屋からも一体以上が発見されている。約三年前に行なわれた県道拡幅補装工事では、浜添氏宅地の向側対趾点に当る県道沿いの地点で、地表下約一・五メートルの深さから人骨一体、市道分岐点付近から二体以上、貝塚東側の砂糖小屋付近から一体以上の人骨が発見され、⁽²⁾ 約十二体以上の埋葬が貝塚の周辺部で行なわれていたことが明かである。

以上に述べた事項によつてみると本遺跡は、貝塚を中心として周辺に埋葬址を有するもので、生活地域とこれを囲むやうな形の埋葬地域から形成された特色ある遺跡であること

がわかる。

貝塚から海岸までの距離は約一三〇米、眼下に東支那海を望む景勝の地であり、南には大町川の沖積低地をひかえ、低地の向側の丘陵には能野焼の窯址もあつて、立地条件はきわめて良好で、弥生時代の居住地としては典型的な環境にある。ただ前面の低湿地が狭小で充分の農耕生産をあげることができなかつたものと思われる。これがこの時期には少ない貝塚形成の一因であろう。

II 調査経過

本遺跡の発見は昭和四五年一〇月の集中豪雨による遺跡地の一部崩壊の結果であつた。この崖くづれによつて貝殻が露出し、土器、獸骨、石器類が地表に流出した。

西之表市教育委員会は県社会教育課と連絡をとりその処置について検討し、その間県社会教育課の盛岡文化係長の現地視察があり、筆者も昭和四六年二月茎永、島ノ峯遺跡の調査のついでに現地を見学した。西之表市教育委員会は遺跡の重要性を認めて発掘調査を実施することを決定した。

調査は昭和四七年三月二十四日より全月三〇日まで七日間実施した。次に調査担当者をあげる。

◎調査員

鹿児島県文化財専門委員 河口貞徳

ラサール高校教諭

上村俊雄

鹿児島大学々生

本田道輝

立正大学々生

長野真一

種子島実業高等学校教諭並びに学生拾数名

人夫数名

なお発掘の実施にあたつて、準備、設営など諸般の事務に万全を備された教育委員会担当の方々の氏名を記して感謝の意を表したい。

西之表市社会教育課長

今別府 望

全主事

土屋辰夫

西之表市立博物館主事

田上利男

全

飯島安豐

終りに付記しておきたいことは、この遺跡が四五年に発見される前に何回かの遺物の事実上の発見があつたことである。ことに残念なのは重要な埋葬遺跡であり、縱来発見の埋葬遺跡が東岸のみにかぎられている中で、只一つの西岸の埋葬例であり、しかも埋葬法に東岸と異なる点もあつたらしくことなどもあつて、埋葬の遺構と共に遺体も滅失したことをおしみてもあまりがある。然し現存遺跡の中に埋葬遺構も残存しているものと推定されるのでこれについての処置に万全を期したいものである。

遺跡

遺跡地は県道上中線と、大町川の支流に沿つて分岐した市道に西と南を限られた地域であることは前述したが、更に遺跡の中央を孤状の市道が凸面を南に向けてよぎつており、これと交叉するように、四五年の豪雨による侵食溝が西南方向に流下していて、貝塚は三分された形となつていて、発掘はこの三地点について行なつた。孤状市道北側の雨裂に沿つて略南北方向に幅二米、長さ七・六米のAトレンチを設け南より二米毎に区画してI区～IV区（IV区は一・六米）とし、孤状市道南側、東よりの地点に東西方向に幅二米、長さ一三米のBトレンチを設け、二米毎に区画して、II区～VII区（VII区は一米）とし、孤状市道南側、西よりの地点に、西北～東南方向に幅二米、長さ四・八米のCトレンチを設け、二米毎に区画し、東よりI区～III区（III区は〇・八米）とし、た。

A、Bトレンチの地点は松をまじえた灌木で覆われていたため、最初樹木の伐採を行ない樹根を除去する作業にしたがつたが、意外に根は浅く、編成力もかたくなびに作業がはかどつた。A、Cトレンチは上村俊雄、Bト



第二図 Aトレンチの発掘状況
左側はCトレンチ

レンチは本田道輝が担当し、河口が総括した。

Aトレンチ

Aトレンチの設定地点は、地形は東より南へ傾斜しているが、貝層は略水平に堆積し、地表からの深さは約八〇厘米である。層序を次にあげる。

I層（表層）、二〇厘米、黒褐色層、樹根多し。

II層 六〇厘米、白色砂層、無遺物層

III層 四〇～三〇厘米、貝層、遺物包含層

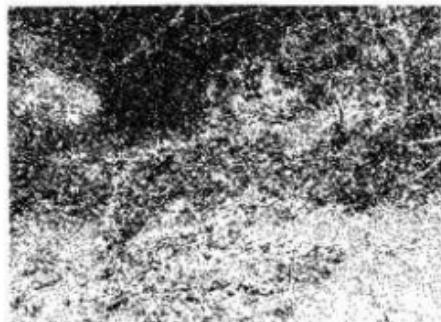
IV層 黄色砂層、無

遺物層

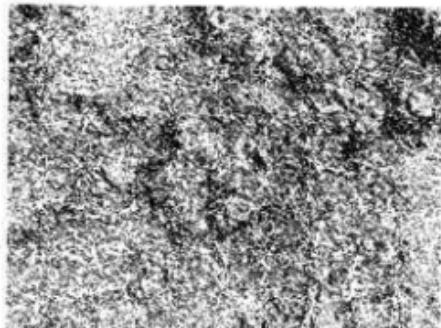
V層 熊毛層、頁岩

遺物包含層のIII層は小形の巻貝が多く、現在普通に沿岸で採取される種類である。貝その他の自然遺物についてはIV区東側断面南よりに三〇厘米四方の柱状採取を行ない、平山武章氏の同定を依頼する予定があるので結果を待つて報告したい。

遺物には彫形土器の破片の他、自然礫がみられ使用痕のあるものもみられた。自然遺物では捕食したと思われるイノシシ、シカ、ウミガメ、岩礁性の魚族の骨などが



第三回 Aトレンチ西側の貝層堆積状況



第四回 AトレンチI区遺物出土状況

発見された。

地層模様形資料

市立博物館に陳列する資料として、Aトレンチ西側に雨裂によつて生じた美しい貝層断面を利用することとし、貝層露出面南端より四メートル五メートルの間の一メートル幅を、厚さ三〇センチに切り取り、この資料を実物大に陳列用ケースに復元する予定で、復元には博物館主事鮫島氏が当ることになつてゐる。

Bトレンチ

Bトレンチの設定地点は北側と南側を市道にかぎられ、西側は雨裂に、東側は低地に閉まれ、孤立した細長い丘陵状を呈している。基盤の熊毛層の上に厚く堆積した砂層中に、貝層が堆積したものである。層序はAトレンチと同様であるが、貝層に達するまでの砂層が厚く、トレンチ西端のⅣ区では貝層表面までの深さ一・七五メートル、東端のⅠ区では約二・二メートルで貝層表面は西から東へ傾斜していたことが判明している。貝層の厚さは三〇~四〇センチであるが、ところによつては貝の包含が少なく、Aトレンチに比較して、自然遺物は概して少ないが、人工遺物は反対に多い点が注意をひいた。

遺物包含層である貝層に至るまでの砂層が厚いために、発掘中にトレンチの壁が崩壊しトレンチ幅の発掘が不能となつたので、中央部の五〇センチほどの幅を発掘した。このトレンチからは鉄製釣針をはじめ、鉄器の柄部、貝製の有孔円盤、丹冊状の符、局部磨製石斧叩石など土器以外にも重要な遺物が出土した。

発掘の途中にしばしば壁の崩壊があつて作業の進行をさまたげられ、前記のように貴重

な遺物を出土する地点であつたにもかかわらず充分の発掘ができなかつたのは残念である。方法を改めてこの地点を全面発掘を行なつたならば、驚くべき資料が発見され、刮目すべき結果が得られることと思う。

Cトレンチ

CトレンチはBトレンチの北西、県道よりの孤立丘陵状の地点に設定した。トレンチ南端部のI区にわずかに貝層が認められたが、地層が攪乱され遺物の出土量もきわめて少ないが、現代の陶器片一個の他はすべてA、Bトレンチと同一型式の土器片が発見される。注目すべき出土品として貝輪一個があつた。

IV 遺 物

遺物についての記述をするに当つて、ことわつておきたいことは、今回発掘した遺物が手もとにないまま、発掘日誌、写真などを資料として記述しなければならなかつたことである。したがつて詳細は後にゆずつて、一、二の遺物について概略を述べる。

土 器

本遺跡出土の土器はすべて一型式に属し、発掘されたものは甌形土器だけであつた。ここではBトレンチ附近より畠山稔君（当時住吉中三年生）等によつて掘り出された甌形土器（第五図）について述べる。この土器は中形の釣鐘形で、充実した脚台をもつていて、底部中心部がわずかに凹み、あげ底風になつていているのが特徴である。胎土は砂粒を多く含



第五圖 Bトレーナー附近出土の變形土器

み焼成は良好で、器壁は薄く四～六粁程度である。色調は表面紅褐色で、頸部には浅い刷毛目を斜行させ、下胸部には条痕様の横走する筋がみられる。又脚部は縦位の跡跡がみられ擦痕をのこしている。内面も紅褐色を呈し口縁部附近は横の刷毛目がみられるが、屈曲部分以下にはみられず、下脛部以下は外面に付着した炭素と呼応するよう煮沸による爛れをみせており。輪つきによつて作成されたことが、土器外面の凹凸によつて明かである。

文様はするどい筆によつて胴部以上に描かれ、直線と曲線を組み合せた特色のあるもので、二並行線を基本文様として、山形又はその変形で構成され、間に二並行線間を斜線で充めたものである。口縁部外面と頸部には粘土紐をめぐらし、口縁部は肥厚して断面は三角形を呈する。頸部の凸帶は幅が狭く、薄くひらべつたるものであるが、繩を表現した刻目と、結び目垂れ下りがある。一見弥生式土器にみられない特色をもつているが、器形や、文様をよく検討すると弥生式土器の要素を至るところに有し、まちがいなく弥生式土器であることを示している。この型式の編年上の位置は後期とされている。理由としては、(4)「この土器にともなつて土師器・須恵器もみられることから、終末期は明らかに弥生の下限を越えてまで相当な年代的な幅をもつていたことがわかる。」として共伴遺物を編年によりどころとしている。しかしその後の記述には、「この時期の包含層は種子島

でさえ明瞭なものは見出されていない。」と述べて既発見の遺跡が保存状態が悪く、擾乱層であつたことを示している。したがつて前述の土師・須恵との共伴となるのは信憑性がなく編年によりどころとはならない。現に上能野貝塚の土器は單一型式に限られ、土師・須恵の伴出は全然認められない。

種子島の弥生時代の土器文化は、前期から中期初頭までは、北九州系の文化が西海岸づたいに南九州を経て流入しているものと思われるが、その後種子島独自の文化を形成している。鳥ノ塚出土の變形土器は頸部に幅の広い凸帯をめぐらし、三条の沈縁を施し、凸帯下に重孤文を籠描きしたものがある。北九州より九州西海岸地方に分布する弥生前期の壺形土器の文様から転化したものと思われる。器形は充実したあげ底風の脚台を有する變形土器で、弥生時代前期末から中期にかけて、城ノ越、龜ノ甲、境目西原、入来などの諸遺跡でみられる變形土器の脚台の系統を引くものである。種子島ではこの器形が後まで継承されている。文様器形など種々の要素を混入している点から、時期的にはかなり下るものと見られる。

この鳥ノ塚の變形土器の口縁部に粘土紐をめぐらして肥厚させ、頸部の凸帯が狭く、ひらべつたくなつたのが上能野の變形土器である。文様は細刻線の組み合さたもので、複雑多様化して、九州中南部にみられる重孤文土器の発生と規を一にするものである。弥生後期に属するものと見られる。この土器には同一器形の素文土器があり、両者を合せて一型式とみるべきで、他に変形土器などもあるものとみられる。上能野貝塚出土の土器を標式として上能野式と呼ぶことにしたい。

石器

半磨製の石斧一個、叩石数個などが出土している。この時期には一般に石斧は消滅して鐵器に代つてゐるのであるが、ここでは残存していることは、新しい発見例といえる。

貝製品

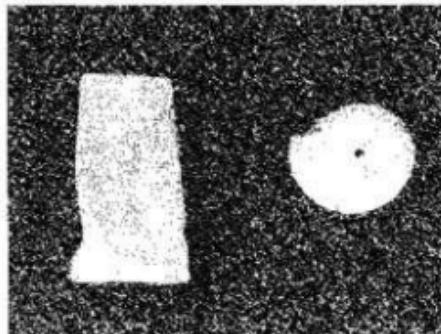
貝輪、貝符、鍛飾などが出土している。第六図右の貝符はBトレンチV区3層出土のもので、長さ五・五厘米、幅三厘米、一端に近くえぐり状のけずり込みがみられる。だいみよういもがいを截断加工したものである。他に加工途中のものもみられた。

第六図左の鍛飾、中央に穿孔してあるので鍛飾としたが、紐づれの痕跡は認められない。長径三。

二厘米、厚さ五毫、いもがいの穀頂部に加工したもので他にも類品の出土があつた。

第七図の貝輪はCトレンチI区一層下部から出土した。めんがい製である。この他にも貝製品の出土があつた。

第六図 貝製品



第七図 Cトレンチ出土の貝輪



鉄製品



第八図 Bトレンチ出土の鉄製釣針

第八図の鉄製釣針は現存の長さ約五種であるが、頭部が欠失している。本来六種余あつたものであろう。断面は台形で、先端はとがつていて、弥生時代の釣針の出土例は多くなく、かつ骨製または角製で、鹿児島県では高橋貝塚にイノシシの牙でつくつたものが出土している。鉄製のものはきわめて少なく、九州では長崎県原ノ述と大分県下城遺跡にその例があり、他には神奈川県昆沙門B洞穴に出土例があるだけで、きわめて稀といえる。

V む す び

上能野貝塚は狭い低湿地と、広い海に面した立地条件としては一応ととのつた弥生時代の貝塚である。しかも貝塚の周辺は同一時期のものと思われる埋葬遺跡地が隣接して設けられている。

一般にはこの時期になると農耕生産によつて生活が維持されるのが普通であるが、本貝塚の状況をみると狩獵・漁撈が可成りの比重をもつて行なわれていたものと思われ、石斧などの残存することからみても、その生産方法にも縄文時代以来の様相が一部残つていた

ものと思われる。しかも釣針に鉄を用いてることは、他地域に出土例が少なく、移入品とは思われないから、鉄材の加工技術がかなり進んでいて現地で生産されたものと思われる。

埋葬には広田遺跡などにみられる貝符の副葬の習慣が種子島の全域に行なわれていたようで、本遺跡出土の貝符も同様な葬制の存在を示すものであろう。このような葬制は南島一体に行なわれたものと思われる。ただし上能野の埋葬は東岸の鳥ノ峯のような覆石墓のように櫛で遺体を被覆するような葬法ではなかつたようである。

本遺跡出土の土器はきわめて特色のあるもので、土器の文化が特殊的であるように、本島の弥生後期の社会構造も特色をもつたものであつたろう。これは種子島の占める位置と風土が大きな原因であるといえる。

了

註

- (1) 稲下安義氏の談
- (2) 稲下安義氏外よりの聞きとりによる。
- (3) 盛岡尚孝 中德子町郷土誌 二一五頁
- (4) 全 (3)
- (5) 二一六頁